

オスとメスがまるで別種?! 冬の風物詩 フユシャク



↑猿江公園で見つけたウスバフユシャクの交尾。上がメスで下がオス。メスは完全に翅が消失しており、とても同種には見えない。メスの体長は約1cm。



↑上の写真とは別個体のメス。産卵後なのか、腹がしぼんでいる。尾部はブラシ状。脚が長くてクモのようにも見える。



↑上の写真の撮影場所。メスは結構高い所まで登っていくようだ。撮影するのが大変だった...

昨年末、虫に詳しい3年生のSくんと虫談義に花を咲かせていたとき、「猿江公園にフユシャクがいるらしい。」という話題があがった。なんとフユシャクがこんな身近に!ぜひ見てみたい!と思い、さっそく探してみることにした。

フユシャクというのは蛾のことで、“シャクトリムシ(尺取虫)”で有名なシャクガ科の仲間だ。フユシャクの非常に興味深いところはメスの形態だ。**メスは翅が退化していて、パッと見るととても蛾だとは思えない奇妙な見た目をしている。**一方でオスは普通の蛾と同じ外見をしているから、メスの異様さが目立つ。メスの見た目以外にも、フユシャクは**成虫が冬にしか現れない**というとても変わった生態をしていて、都市公園でもいるところには普通にいるそうだが、あえて探そうと思わなければなかなか見られない。(たださえ寒い季節な上に夜行性である。わざわざ冬の夜に虫を探す物好きはあまりいない)。

フユシャクのメスの姿を見てみたくて猿江公園を探してみたのだが、これがなかなか見つからない。そもそもいるかどうか分からないのに、気温5°Cの夜の公園で懐中電灯片手に樹を照らしているのだ。我ながら怪しい人物だなと思った。全然見つからないし、寒いし、犬の散歩に来ている人の視線が気になるし、少々くじけそうになったが、探し始めて何日かたった頃、ついに見つけた!**ソメイヨシノの枝の上で、ちょうど交尾をしているところを発見することができた。**やはり猿江公園にもいたのだ。オスとメスが全く違う姿をしていて、交尾していなければ同種だとは思えなかっただろう。なんとも不思議な光景だ。こうやって、いそうなところをあれこれと予想しながら探し回って、最終的にちゃんと見つけられた時はやはり嬉しいものだ。

さて、フユシャクの生態についてだが、メスは見ての通り飛ぶことができないので、**フェロモンを使ってオスと呼ぶのだ**そうだ。地中で羽化したメスの新しい成虫は、夜に木に登りおしりを突き出してフェロモンを漂わせる。真っ暗で何も見えない世界で、オスはこのフェロモンを頼りにメスを探し出し、交尾をする。メスに翅が無いのは、飛ぶことにかかるエネルギーをすべて産卵に使っているからだろう。

冬の寒さでは活発に動くことができないので、交尾相手と出会うのは大変なことだ。しかし、逆に暖かい季節は天敵が多いので、**捕食されるリスクを避けて冬に適應してきた**だろう。他の生物が活動していない寒い季節に、フユシャクがひっそりと命をつないでいる姿を見ることができて感動してしまった。

一般に、蛾というと、気持ち悪がられたり、嫌がられることの多い生き物だと思うが、多様性は非常に高く、**日本のチョウが250種ほどであるのに対し、蛾は5,000種以上**と言われている。多様な種がいれば、生態も多様で、今回紹介したこのフユシャクや前号のマダラマルハヒロズコガ(いきもの記No.18)などのように、ヘンテコな姿をしているものもいて、深く知れば知るほど面白い。